

共同的な営みとしてのコミュニケーション

三木那由他 (Nayuta Miki)

兵庫医療大学

ひとが何かをすることで何かを意味するとはどういうことなのか？ 話し手の意味の成立条件をめぐるこの問題に対しては、Grice (1957)以来、話し手の意図という概念に依拠して答えを与えようという方針がスタンダードとなっている。現在、意図基盤意味論 (intention-based semantics) と総称されるこの枠組みにおいては、話し手が発話によって p ということの意味するとは、 p という命題をその内容に含む、ある複雑な意図 (ないし意図群) を持って発話をおこなうことであるとされる。この想定のもとで、ではその複雑な意図 (群) とは具体的にいかなるものなのかと分析を進める、それが意図基盤意味論における話し手の意味へのアプローチであり、話し手の意味の分析という分野におけるパラダイムである。

意図基盤意味論には意図の無限後退というよく知られた問題がある。Grice (1957)では話し手の意味の成立条件として、それぞれ特有の構造を持つ三つの意図が話し手に要求されることになっているが、分析中に現れる意図のそれぞれについて、話し手がその意図を聞き手に認識させようと意図していない状況を考えることで、システムティックに反例が構築可能であるということがわかっている。そしてその反例を排除しようと、〈しかじかという意図を聞き手に認識させようという意図〉なるものを話し手に要求したところで、この新たな意図に関して同じ方法で反例を作ることができる。このいたちごっこには原理的には終わりがなく、意図の無限後退が生じることになる。

本発表では、三木 (2019) での議論に則り、意図基盤意味論ではこの問題を乗り越えられないということを指摘したうえで、意図基盤意味論に代わる話し手の意味の理論として、共同性基盤意味論と私が呼ぶ枠組みを紹介する。

意図基盤意味論の問題点を理解するためには、話し手の意味の分析という営みそのものを反省し直す必要がある。話し手の意味の分析は、標準的には広い意味で目的論的な想定のもとで試みられる。何かを意味する際、話し手の発話は何らかの意味で何かの実現に向けられた行為となっており、その「何か」が具体的に何であるのかを特定することが、話し手の意味の分析の一部とされているのである。例えば Grice (1957)では、話し手の意味の場面において、話し手は聞き手に何らかの信念 (あるいはより広く、何らかの反応) を生じさせるために発話をしているとされている。それゆえ話し手の意味の分析には、話し手の発話の目的を一般的な形で特定するという課題が、そのひとつのステップとして含まれている (「帰結問題」と私は呼んでいる)。さらに、話し手の意味の分析を与えるには、発話の目的と発話そのものがどのように結びついているのかということも特定しなければならない。これは私が言うところの「接続問題」であり、意図基盤意味論とは、意図という概念でもってこの問題に答えようとする一群の立場の総称である。さらに話し手の意味の分析においては、およそ話し手が何かを意味しているか

らには、話し手が何かを意味しているということ自体は話し手と聞き手のあいだでオープンになっていなければならないと想定されている。これを「話し手の意味の透明性」の想定と呼ぶなら、意図基盤意味論は話し手の意味の透明性を前提しつつ、意図という概念でもって接続問題に答えようとしている立場だということになる。

だが、話し手の意味の透明性の想定と、接続問題に意図という概念で答えるという発想は、実はうまく調和していない。三木（2019）の第三章で論証しているように、この二つの前提を置くと、それ以外の点で具体的にどのような理論を構築するかによらず、意図の無限後退が論理的に導出されるのである。意図基盤意味論が意図の無限後退問題を克服できずにいるのはこのためであり、話し手の意味の透明性をあくまで前提とするならば、意図基盤意味論にこの苦難から抜け出す道はない。

私の提案する共同性基盤意味論では、話し手の発話の目的を、話し手と聞き手のあいだでの集合的信念の形成だと考える。そのうえで、話し手の発話と、発話に対する聞き手の理解（ないしその表明）が、集合的信念を形成するための各参加者からの準備表明となっているとする。そしてさらに発話がある集合的信念への準備表明となるという事態が成立するのは、話し手の意図によってではなく、その発話がすでに話し手と聞き手のあいだで共有された手続に従っていることによってであると捉える。

ふたつの立場の違いは、コミュニケーションを個人的な営みと捉えるか、共同的な営みと捉えるかという点にある。意図基盤意味論に従うなら、コミュニケーションとは話し手が個人的にある意図を持って発話をおこない、それを受けて聞き手は聞き手で個人的に話し手の意図を解釈し、反応することになっている。だがこうした個人主義的な立場で話し手の意味の透明性で要求される「オープンネス」を説明することはできず、その歪みが意図の無限後退問題として現れる。他方で共同性基盤意味論では、コミュニケーションが共同的な営みであることははじめから前提とされており、そしてその共同的な営みへの参加として話し手と聞き手の行為が捉えられている。コミュニケーションは共同的な営みとして、その共同性を捨象することなく考えられるべきなのである。

だが、コミュニケーションを共同的な営みとして捉える共同性基盤意味論において、話し手の意図の役割はどうなるのか？ 私の考えでは、もはや話し手の意図が話し手の意味する内容を決定するといった、大きな役割は認められない。その代わりに、自分の発話がすでに共有されているどの手続きの利用に当たるのかだけは指定するという、ミニマムな役割が与えられることとなる（最小意図説）。レヴィンソンによる用語を援用するなら、話し手の意味に関して意味論的意図は存在せず、ただ範疇的意図のみが認められる、と言い換えることもできるだろう。

Grice, H. P. (1957) "Meaning." *The Philosophical Review* 66(3): 377-388. Reprinted in *Studies in the Way of Words*, edited by H. P. Grice, 1989, Harvard University Press, Cambridge: 213-223.

Levinson, G. (1996) "Intention and interpretation in literature." In *The Pleasure of Aesthetics*, Cornell University Press, Ithaca: 175-213.

三木那由他（2019）『話し手の意味の心理性と公共性』勁草書房